

# 『雨月物語』

## 「吉備津の釜」をめぐる

建川克子

### 序

『雨月物語』は明和五年（一七六八年）三月の脱稿から、八年の歳月を数えた安永五年（一七七六年）四月に刊行された初期読本である。作者は、その序文において

「剪枝崎人と記されているのみであるが、それを戯号として持つ上田秋成であることは疑いが無い。この物語は序文を含めた全五巻九篇からなる怪異短編小説集であり、中国古典ならびに日本古典を典拠とした翻案小説でもある。

その中で巻之三に収められている『吉備津の釜』は、夫に裏切られた女性磯良の「鬼化」としての復讐を描いた作品である。その結末は作者自ら「浅ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん」と語っている通り、実に恐ろしいものであった。しかし、実際に秋成はこの『吉備津の釜』を、恐怖に満ちた単なる怪談として描いているのであるうか。そこで磯良と正太郎という二人の人物を中心に、秋成が本篇に秘めた意図が一体何であるのかを探っていくことにする。

### 第一章

#### 第一節 冒頭部分の意味

『吉備津の釜』の冒頭部分は、そのほとんどを中国明の謝肇淛編集による『五雜俎』からとっている。全体を通して「妒婦」の及ぼす害について述べているが、序文自体は大きく二つに分けることができる。

まず前半において嫉妬に狂う女性の災いの大きさに触れ、「其の肉を醢しびしにするとも飽べからず」という激しい言葉で批難している。この部分から読者は、当然本篇が「妒婦」を描いた作品であることを予想する。確かに死後の磯良は「霹靂はたなみを震うて怨を報ふ類」の女性であったが、はたしてそれは磯良の嫉妬からおこったものなのだろうか。私はそうだと断言できないと思う。磯良は夫である正太郎が浮気をし、それが原因で父親に閉じ込められた折、夫の浮気の相手である遊女袖に対して暮らしが立つようと、ひそかに物を届けるといふ行動をとっている。もしも磯良が

嫉妬に狂う女性であったならば、夫の愛人に情をかけるなどということは考えられないはずである。つまり、磯良は序文の前半で述べられているような「嫉妬」には当てはまらないと言える。

一方、後半においてはそれまでの「嫉妬」への批難を「さるためしは希なり」として緩め、逆に男性の取るべき態度を示している。それは「婦を制するは其の夫の雄々しきにあり」という一文に集約されている。そして更にこの一文は、「かりそめなる徒ことに、女の慳しき性を募らしめて、其の身の憂をもと」めてしまった正太郎の生き方に対する警告であると同時に、『吉備津の釜』全体の教訓でもあるのだ。

このように前半において女性の執念のあらわれである嫉妬を批判し、後半に入るとそのような女性を教え導くことのできない男性について触れることによって、この物語全体を暗示しているのである。そして最後に「雄々しき」という秋成の求める男性像、あるいは物語の教訓とも言うべき言葉で締めくくって本文へと導いているのである。

## 第二節 「御釜祓」の意義

本篇における「吉備津の御釜祓」は、実際に岡山県の吉備津神社でかなり古くから行われていた神事である。『雨月物語』が書かれた江戸時代には、「金鳴・釜占・御釜祓」として名高く、その記録も『本朝神社考』<sup>(注2)</sup>など多くの文献に残されている。

本篇で「御釜祓」が行われるのは、吉備津神社の神主の娘である磯良と、井沢正太郎との結婚を占うためであった。そしてその占いの結果は「只秋の虫の叢にすだくばかりの声もなし」という凶祥であったのである。けれども磯良の両親である香央夫婦は占いの結果を無視し、予定通りに婚礼を挙げさせ、最終的に磯良も正太郎も共に死を迎えてしまふことになる。この点に関しては、「御釜祓」をすでに結納を取りかわした後に行っていること、さらに占いの結果をまったく無視していることという二つの大きな問題がある。これらのことから『吉備津の釜』は一見、神意を無視したその罪によるその悲劇であるのとれそうである。しかしながら「御釜祓」を行ったのもその結果を無視したのも、全て香央夫婦であるにもかかわらず、被害を受けた対象が磯良と正太郎であったことを考えると、神意を無視したことが直接関係しているのではなく、凶祥は二人の運命を予言あるいは警告したにすぎないのである。つまり、この「御釜祓」は物語の展開そのものに大きな影響を与えているものではなく、物語をより物語らしくするための構成上の一手法にすぎないのではないかと考えられる。そしてそれは本文末尾に「御釜の凶祥もはたがはざりけるぞ、いとまたふとかりけるとかたり伝へけり」という、言わば物語の落ちともとれる一文をもってくることによって、更にその性格を強めているのである。

以上のように、「御釜祓」は磯良と正太郎の運命を左右する重大なものと言うよりも、物語の外形を形作るものと

して秋成はとらえていたのではないかと思う。

## 第二章

### 第一節 磯良の人物像

本篇に登場する磯良は「うまれだち秀麗みやびやかにて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工みなり」と語られているように、家柄が良いことは勿論、才色兼備の申し分のない女性として紹介される。けれども夫の裏切りを契機に、彼女の姿は一変し、最終的には悪鬼となり夫を取り殺すという、想像もつかない結末を迎えることになる。磯良を復讐の鬼へとかり立てたものは何であったのか、そしてその磯良とはどのような人物であったのかを考えていきたいと思う。

磯良は結婚後、夫である正太郎やその両親に心を尽くして仕え、幸せな日々を送っていた。その献身ぶりはまさに家庭婦人の模範であったのである。ここでの磯良は井沢家の嫁としての責任を必死に遂行しようと、完璧なまでにふるまっている。これはすなわち磯良自身が物事に對し、ひたすらに打ち込むという性格をもっていることのあらわれであろう。この一途さこそ、彼女の運命を左右する重大な要素であったと言える。そして更に磯良の一途さは、夫の帰郷の約束を信じて、死んでもなお待ち続けた『浅芽が宿』の宮木の心情とも重なるのである。一人の男性に對して一途に尽くすという行為からすれば、この二人には共通点を見出すことができる。

ところがそのような磯良の誠意に反して起こったのが夫の浮気であった。これは磯良にとって生まれて初めて味わう屈辱ではなかったろうか。この時、彼女の心には自分も裏切った夫の「徒なる心」に對する「怨み」が生まれたが、一方では夫の愛人の暮らしを助けるといふ、「怨み」とは逆の行動をとっている。これは全く矛盾した行為のように見えて実は、夫が一日も早く自分の元へ戻ってきて欲しいという磯良の必死の思いがそうさせたと考えられるのではないだろうか。しかしながら夫は戻るところか磯良を欺いて愛人と共に出奔してしまったのである。それを知った時、磯良はもはや自分自身の心を制御する道を見失ってしまったに違いない。いや、逆に言えば自分の感情を押し殺さずに、素直に表現する術を身につけたと言つてよいのかもれない。それまで心の底に押しとどめ、必死に抑え続けてきたものが一瞬にして噴き出してしまったのである。つまりここから磯良という女性の新たな顔があらわれはじめた。つまり彼女にとっての出発点であったと考えられる。けれども、精神的出発を迎えたのと同時に肉体的終結をも迎えてしまったのである。言いかえれば「死」をもって「生」を与えられたことになる。磯良にとっての肉体的「死」はそのまま精神的「生」へとつなずるものであり、「死」を超えてしか「生」を手に入れる方法は存在しなかったと言え(註3)る。以後の磯良は、肉体的「死」の中で精神だけが生き続けていたのである。

物語の後半に入ると、磯良はまず「窮鬼いきだま」として夫の愛

人である袖を七日にして取り殺し、その復讐の矛先をいよいよ正太郎に向けることになる。そして夫との再会の日から四十二日もの間続く「かの鬼」磯良の執念深い復讐の態度には、生前の彼女の一途さを重ねずにはいられないのである。これはまさに磯良の一途さが形を変えて具現したものであるのだ。そして最終的には夫の髻ばかりを残し、後の肉体を抹殺するという復讐をなすとげる。この行為は復讐心という精神だけが生きていた磯良にとって、夫に対してなせる最高の復讐であったのである。

以上述べてきたように、磯良を貞淑な妻から復讐に燃える鬼へとかり立てたものは、磯良自身の精神的な「生」への目覚めであった。模範的に女性という枠の中から何の制限もない「鬼」へと生まれ変わることで、磯良は自分自身の存在をはっきりと把握し、それを周囲に認めさせる方法を手にしたのである。四十二日間続いた「家を繞り或いは屋の棟に叫びて、忿れる声夜ましにすぎまし」という激しい復讐のエネルギ―源はまさにこれであった。しかしながらその「生」は肉体的「死」をもって与えられたものであり、そこに磯良の女性としての悲劇が生まれたのである。その意味においては、夫の帰りをひたすら待ちわびてひっそり死んでいった『浅芽が宿』の宮木もまた、悲劇の女性であったと言わねばならない。それならば、秋成はなぜこれらの女性達を悲劇のまままで終わらせているのだろうか。それは、封建社会の中で一定の枠に入れられて生きる女性達の、自らの存在すらも表現できない、あるいは表現する

ことを許されないというどうにもならない厚い壁があることを秋成が感じ取っていたからではないだろうか。磯良は正太郎に復讐することで、一方の宮木は夫の勝四郎をひたすら待つことでそれぞれの前にある壁を超えようとしたのである。けれども、その誰もが悲劇を迎えているとでも分かるように、それは超えられる壁ではなかった。つまり、自己を表に出すことが許されないのは封建の世に生きる女性達の宿命であったのである。秋成はこのことを磯良、あるいは宮木を通して描いているのである。

このように、磯良は序文で述べられているような嫉妬に狂った憎むべき女性ではなく、自己の存在を、怨みを晴らすための復讐という形でしか表現することのできない、悲劇の女性であったと言える。

## 第二節 正太郎の人物像

正太郎は、妻磯良と共に物語を形成する上において重要な役割を担っている。まず語り手によって述べられる正太郎は、農業を厭ふあまりに、酒に乱れ色に耽りて、父が掟を守らず」という、わがままな一人息子として読者の前に現れる。そして、最終的に「腥々しき血」と「髻」だけを残して闇夜に消されるという残忍な結末を迎えるわけであるが、なぜ正太郎がそのような運命をたどらなければならなかったのかを、秋成が求めた「雄々しさ」を含めて考えていくことにする。

先に述べたように、井沢家の一人息子である正太郎は手

に負えない放蕩者であった。そこでそれを改心させるために両親が選んだ手段は、「良人の女子の顔よきを姫りてあはせ」ることだったのである。このような考えの裏には、容姿の美しい娘をあてがっておきさえすれば息子の放蕩もなおるのではないかという、両親の短絡的思想があったと考えられる。そこへ嫁いできたのが両親の望み通りの美しい女性、磯良であった。けれども正太郎は遊女袖と浮気をし、遂に磯良を捨てて出奔してしまうのであるが、磯良が容姿も性格も申し分のない女性であったにもかかわらず、なぜ正太郎はこのような行動を取ったのだろうか。その理由として次の二点が挙げられる。まず、磯良があまりにも完璧で非の打ち所のない人間であったために、それとは全く異なる性格を持つ正太郎は彼女の振舞いに息がつまり、逃げ場を求めていたのではないかということである。つまり、磯良の完璧さを見せつけられれば見せつけられるだけ、それが彼女の意志ではなかったとしても、正太郎にとって自己の欠点をさらけ出すのと同じような苦痛を味わうことだったのである。もう一つの理由は正太郎自身の「軒たる性」であった。この生来の浮気っぽい性格が磯良一人ではおさまらずに、次の女性へと心移す要因になったと考えられる。そしてこれら二つの理由は全く独立しているのではなく、互いに影響を及ぼし合いながら悪い意味での相乗効果を生み出していたのである。

このような正太郎が一度だけ誠意を見せている場面がある。それは共に逃げて来た袖が原因不明の病で倒れ、その

まま亡くなった時である。正太郎はその時、「みづからも食さへわすれて抱き扶」け、あるいは「窮鬼といふものにや、故郷に捨し人のもしやと独むね苦し」とわずかながら自責の念にとらわれている。しかしながらその心も、袖の従弟である彦六の「いかでさる事のあらん」と「やすげにいふ」慰めの言葉によって簡単に流されてしまうほど弱いものであった。結局、袖に対して見せた誠実さは一時的なものであり、実際の正太郎は優柔不断で自立心の欠けた男だったのである。

袖の死後、正太郎は鬼となった磯良の復讐的になるが、ただただ恐れ逃げるばかりで一向に自らの罪を反省しようとはしない。いや、反省するどころか自己の罪に気付き、それを認めることすらしてはいないのである。これ以前にも、正太郎が自らの行動を反省すべき機会は何度も訪れてはいたが、それらにことごとく背を向けて一度も振り返ろうとはしなかった。それゆえに、最終的に髻ばかりを残して消し去られてしまうという、悲惨な結末を迎えてしまったのである。

このように正太郎は自らの行動を省みることなく、また、困難な立場に置かれた時も自ら進むべき道を決められない男であった。その結果として、秋成が冒頭において述べていたように「其の身の憂をもと」めてしまったのであり、「婦を制するは其の夫の雄々しきにあり」という教訓を活かしきれずに終ったのである。

では、秋成が求めた「雄々しき」とは一体どのようなも

のであったのだろうか。これについては、同じく『雨月物語』の中の『蛇性の姪』における豊雄と比較することで明確になるのではないかと思う。すなわち豊雄は自分を執念深く追いかける蛇、真女兒が、他人に危害を加えるのを喰い止めるため、進んで自らの命を犠牲にしようとする決心するのである。これがまさしく「雄々しさ」であって秋成の求めたものであったことは言うまでもない。つまり正太郎に欠けていたのはこの心意気だったのである。「雄々しさ」とは、自分自身をしっかりと見つめることのできる目を持ち、どのような苦難に対しても逃げずに自分の力で立ち向かっていける強い精神力を備えていることではないだろうか。そして秋成がこの「雄々しさ」を強調したのは、その時代にあつて次第に忘れられ、失われつつあつた人間本来のあるべき姿への希求からであつたのである。『吉備津の釜』、あるいは『蛇性の姪』を通して「雄々しさ」に対する強い願望を秋成は描いているのである。

### 第三章

#### 磯良と正太郎の関係

これまで述べてきたように、磯良は嫉妬のために怒り狂つた女性ではなく、自らの存在を晴らすための復讐という方法でしか表現することのできない、悲劇の女性であつた。一方、夫の正太郎は「奸たる性」を持ち、「雄々しさ」の欠如した、ただ逃げることにのみ徹した男として描かれている。このような性格を持つ磯良と正太郎の関係

を秋成はどう捉えていたのか、そしてこの二人を通して描きたかつたことは一体何であつたのかを考えてみたいと思ふ。

『吉備津の釜』は磯良と正太郎という二人の男女を軸にした作品でありながら、そこには心の通ひ合つた愛情は感じられられない。物語全体を通して描かれている二人の感情は、怨みと憎しみと、そして恐れ以外の何物でもない。これは何に起因するのだろうか。二人の結婚が本人同士の意志によるものではなかつたことがその要因の一つにあげられるであろう。もし、そうであつたならばその結果はあまりにも悲劇的すぎるのではないだろうか。また、それが運命であつたならばそこには何らかの必然性、つまり正太郎は磯良を選ばなければならず、磯良もまた正太郎でなければならぬという必然性が存在するはずである。それを次に考えることにする。

まず、磯良が自己を主張することに目覚めた女性であつたならば、そのきっかけとなるべき人物、すなわち貞淑な女性の理想とされる磯良をあのようにならぬのである。それは善悪のどちらかを極めるような、そのどちらであつても人より秀でた人間である必要がある。本篇の場合、前半における磯良は模範的な女性であり、疑いなく善を極めた人間である。それゆゑに磯良を変えうるのは、全く逆の顔を顔を持つ、悪を極めたとでも言うべき人間でなければならなかつたのである。それが正太郎であつた。正太郎「酒に乱れ色

に耽」り、浮氣と裏切りを重ねた、磯良とは正反対の性格を持っていた。ここに磯良が正太郎を選ばなければならなくて必然性が生じたのである。

一方の正太郎はなぜ磯良という、自己を破滅させるような女性とめぐり会わなければならなかったのだろうか。前に述べたように正太郎は相当な放蕩者であり、女性の側から見れば敵であるし、世間の疎まれ者でもある。これは秋成が求めた男性としての「雄々しさ」を備えた人物とはかなりの距離があることを意味する。距離があるならば、それを縮めるための方法がなければならぬはずだが、ここでは次の二つが考えられるのではないだろうか。

まず、「雄々しさ」の足りない人間に完全な「雄々しさ」を与えることである。つまりここでは正太郎を改心させ、善人にしてしまうことであり、もう一つの方法は前者とは正反対に、完膚無きまでに糾弾することである。本篇において秋成は後者の方法を用いている。と言うのも、『蛇性の姪』において前者の方法、すなわち豊雄に「雄々しさ」を与えているので、重複を避ける意味もあったのであろう。となると正太郎を糾弾するためには、単に黙認する女性ではなく正太郎を超えるものを持つ女性でなければならぬのであり、その要素を磯良は十分に内包していたのである。ところで、磯良と正太郎の関係を考えるにあたり、『浅芽が宿』の宮木と勝四郎、『蛇性の姪』の真女兒と豊雄の関係を比較して導き出されるのは、男性が女性に対して取る態度によって自然とその道は決定されるということであ

る。すなわち豊雄や勝四郎は自らの改心により命をながらえ、正太郎は己れの非を悟ることなく滅んでいったのである。ここにこの『吉備津の釜』において、あるいはこの三篇を通して秋成が描こうとしていたものがあるのではないだろうか。それは一言で表現するならば、男性の「雄々しさ」に対する覚醒への願いととも言うべきものである。特にこの『吉備津の釜』では、冒頭において「婦を制するは其の夫の雄々しきにあり」と述べその点を強調している。この三篇では完全に「雄々しさ」を取り戻した豊雄、それを取り戻しつつある勝四郎、そして全く取り戻すことが出来ずに滅んでいった正太郎というように、それぞれの段階を示すがごとく描いているのである。

しかし、秋成の筆はそれのみにとどまっているのではない。そこに、磯良という自己を表現することに目覚めた一人の女性を描くことによって、人間の持つ様々な側面を浮き彫りにしているのである。磯良は貞淑で理想的な女性であった。けれどもそれは、彼女が自分自身の存在を確固たるものとして認めさせようとする以前の、言わば仮の姿ともとれるものである。それが正太郎という、自分と全く異なる人間に出会ったことで自己を示すきっかけとなり、更にそれは復讐という、正太郎もそして自分自身をも滅ぼしてしまう方法でしか表現し得ないものであった。そこに磯良の、あるいは『吉備津の釜』の悲劇と悲哀が存在するのである。

結

以上のように、この『吉備津の釜』をその人物像を中心に述べてきた。本篇では磯良と正太郎を軸に話が展開され、最後は両者共に死を迎えることにより、「明けたるといひし夜はいまだくらく」という本文の描写のように暗い影を残して物語が閉じられるのである。この暗さの中で、磯良と正太郎を通して秋成が描こうとしたのはやはり、一人男性のために「鬼」とならざるを得なかった磯良の、ひいては男性を自分の全てと思ひ込み滅んでいった女性の悲哀であり、またそれと同時に「雄々しさ」を持ちえなかった男性への、「雄々しさ」に対する秋成の強い願望ではなかつたらうか。それを「怪談」という一つの枠の中に、「御釜祓」の神事を交えながら巧みに織り込み、更にその枠を超えて人間の持つ様々な側面を描き出したのが『吉備津の釜』であったと言える。

注

- 注1 中国明代の随筆集。謝肇淛著。十六卷。  
注2 神道。林羅山著。一六四〇年頃の成立。三卷。  
注3 同様の指摘を中村博保氏が『雨月物語評釈』の中で  
されている。

参考文献

- 「日本古典評釈・全注釈叢書『雨月物語評釈』」 鶴月洋著  
・中村博保補筆。角川書店。昭和44年3月10日。

○「日本古典文学全集48『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』」 中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳。小学館。昭和48年2月28日。

